

< 研究成果の紹介 >

群飼・除角・混合飼料給与によるブランド牛肉の生産

畜産部

1. 成果の内容

本県特産ブランド肉牛は、肉質が優れていることで定評があります。しかし、肥育期間が長く、素牛価格も高いことで高コスト生産ぎみになっています。

特産ブランド肉牛の生産助長のためには、斉一性の高い高品質な牛肉を、低コストで生産する技術が求められます。

そこで、肥育牛の増体、仕上がり体重の斉一性が良い除角牛の群飼育方式で、飼料費の低コスト化が確実なトウフ粕、モミガラと穀類等を利用した混合飼料の飽食給与による和牛雌牛の肥育技術の確立を図りました。

和牛雌肥育牛は導入した肥育素牛の系統により、発育も増体も違います。

そこで、発育レベルが異なると思われる2系統を選定導入し、その違いに対応するため給与する混合飼料のTDNレベルを上下させ適正な水準を選定しました(表)。

その結果、発育、増体のやや劣る兵庫系75%以上の系統の牛では、肥育前期と中期(各24週間)に給与する混合飼料の乾物当たりTDN水準を64%(配合内容は表を参照)と低く設定することで、また、それより発育、増体の良い兵庫系50%前後の系統の牛や体積系統の牛では、72%と高めに設定することで斉一性の良い、高規格の枝肉が生産出来ることが分かりました(図)。

2. 技術の適用効果と適用範囲

和牛雌牛の群飼育、除角、混合飼料の飽食給与という体系の肥育で、個々の牛が本来持ち合わせた能力が低コストで効率的に発揮されます。農家がこの技術を導入すれば無駄のない、収益性の高いブランド牛肉生産が実現します。

また、群飼育であることと飼料給与が簡易化され増頭が容易になります。

3. 普及利用上の問題点

水分の多いトウフ粕の保存、利用のためにフスマを混合しサイレージ化しました。

また、穀類等と混ぜ混合飼料化した時も給与までの数日間内の変敗防止のためビニールで再密封しました。この作業の簡略化のために個々の農家にあった密封容器の工夫が必要です。

(大家畜担当 山田 陽稔)

表 混合飼料の配合内容 単位:kg(現物重)

配合物名\TDN水準	64%	72%	77%(後期)
トウフ粕サイレージ	50	50	40
稲ワラ	10.8	10	10.8
モミガラ	10.8	2.8	-
圧ぺんトウモロコシ	5	5	10
圧ぺん大麦	5	10	25
一般フスマ	7.5	11.3	15
コーングルテンフィード	10	10	-
食塩	0.5	0.5	0.5
炭酸カルシウム	0.5	0.5	0.5

トウフ粕と一般フスマを4:1(重量比)で混合して密封



